

教師の授業スタイルと子どもの学習の好みの比較による 授業改善の試み

渡 邊 和 志*

【要 旨】 本研究は、教師の授業スタイルと子どもの学習の好みを調べるために、3 学級の教師と児童に対して質問紙調査を行い、その結果から授業改善のための手がかりを得ようとしたものである。主な結果は次のとおりであった。(1)教師の授業スタイルと子どもの学習の好みは、学級によって異なっていた。また、教師と子どもの報告内容の一致点や差異点から授業改善のための手がかりが明らかになった。(2)学習の好みは子どもの特性（学業成績上位、中位、下位）によっても違っていた。このことから、個の特性を考えた授業改善の可能性が示唆された。(3)調査結果にもとづく授業改善の視点や手続きは、担任によって異なっていた。(4)授業改善の方法として、担任教師による授業設計(第1案)－同僚教師や外部指導者による指導助言－授業案の見直し(第2案)－授業実施－再調査－授業評価－授業の再設計(第3案)という新たな授業改善サイクルを提案した。

【キーワード】 授業スタイル 学習の好み 授業研究 授業評価
授業改善 教師教育

I はじめに

近年、日本の学校教育が、世界から注目されているものの一つに、教師の「同僚性」を基盤にした教師文化がある。すなわち、授業を同僚教師が観察し、授業後に授業について話し合いを行う「授業研究(Lesson Study)」というシステムである。脇本(2015)は、Stigler & Hiebert(1999)がその著書“*Teaching Gap*”の中で、日本の学力を支えているのは授業研究であることを紹介したことがきっかけとなり、授業研究が世界的に注目されるようになったと述べている。現在、授業研究は、国際会議の開催や JICA による研究協力など国際的な広がりを見せている。

我が国では、横浜市教育委員会(2011)などの取組に見られるように、複数の先輩教員が複数の初任者や経験の浅い教員をメンタリングすることで人材育成を図っている。この背景には、Schön(1983)による「反省的実践家」という教師像が挙げられる。つまり、教師は、専門的な知識や技能を身に付けるだけでなく、授業を振り返る(リフレクション)ことで成長するというものである。このことは、教師の同僚性とも関連し、教師のリフレクションをもとに実践的知識

平成 28 年 10 月 6 日受理

*わたなべ・かずし 大分大学教育学部附属教育実践総合センター(教育工学)

を教師同士が共有、活用することが、さらなる教師の力量形成や授業改善につながることを意味している。

一方、藤岡(2009)は、今日の学校教育の目的は、従来の知識理解の重視から子どもの自己概念や自己理解の重視へと大きくシフトしているとし、子どもにとって「人間としての教師」は「重要な他者」であり、子どもは自己のなかに教師を映し、教師は自己の中に子どもを映しながら相互に成長すると述べている。つまり、教師と教師によるものだけでなく、教師の子ども理解が教師を成長させるとしている。

ところで、筆者は、これまで困難とされてきた授業中における子ども一人一人の内的過程を、「再生刺激法」の開発によって明らかにしてきた(渡邊・吉崎 1991, 吉崎・渡邊 1992 など)。すなわち、授業をVTRに記録し、授業後にキーとなる授業場面を子どもに見せ、思ったり考えていたりしたことを報告させる方法である。このことにより、子どもの学習特性や学習への興味、授業中における教師と子どもとの認識のズレなどの把握が可能となった。さらに、このことから、教師が授業のどこで、どの子どもに対して、どんな指導助言をしなければならないかといった授業改善への手だても明らかになった。

これらのことから、授業における子ども理解の研究を一層進め、教師が子どもを理解することが、教師を成長させるだけでなく、さらなる授業改善につなげることが期待できると考える。とりわけ、教師と子どもがそれぞれに授業をどのように見ているのか、そして両者の見方・考え方にはズレがあるのかどうかを明らかにすることは、教師の子ども理解および授業改善にとって肝要なことである。そこで、本研究では、「教師の授業スタイル」(主として授業の構成要素にかかわるもの)と「子どもの学習の好み」(主として教授法、情報処理スタイルにかかわるもの)に視点をあて、両者の関係性を明らかにすることが授業改善につながるのかどうかを検討した。

Ⅱ 目的

本研究の目的は、小学校の学級担任の「授業スタイル」と「子どもの学習の好み」を比較し、授業改善の手がかりを検討することにある。そのために、具体的には次の4つを研究目的とした。

- (1) 「教師の授業スタイル」と「子どもの学習の好み」の一致点や差異点から授業改善となる手がかりを検討する。
- (2) 子どもの特性(学業成績上位、中位、下位)による「子どもの学習の好み」と「教師の授業スタイル」を比較し、子どもの特性に応じた授業改善の手がかりを検討する。
- (3) 「子どもの学習の好み」の結果を担任教師にフィードバックすることによって、担任教師が授業改善の手がかりをどのように見出すのかを明らかにする。
- (4) (1)～(3)の結果をもとに、新たな授業改善サイクルを提案する。

Ⅲ 方法

1 「教師の授業スタイル」と「子どもの学習の好み」の把握方法

「教師の授業スタイル」と「子どもの学習の好み」を把握する方法として、質問紙調査法を用いた。「教師の授業スタイル」の質問項目は、授業過程（導入、展開、まとめ）および家庭学習に関する教師の指導行動を、「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」（中央教育審議会 2015）や「授業力自己評価表」（大分市教育センター2016）を参考に作成した（図1参照）。

①…導入 ②…展開 ③…まとめ ④…家庭学習 I…ほとんど II…かなり III…どちらかといえば

項 目		授業スタイル 1	I	II	III	III	II	I	授業スタイル 2
①	1 めざす学力は	知識・技能重視	・	・	・	・	・	・	思考・判断・表現力
	2 学習課題は主に	教師が提示	・	・	・	・	・	・	子どもから
②	3 教材は	教科書が主	・	・	・	・	・	・	教科書は副
	4 理解支援は主に	黒板	・	・	・	・	・	・	具体物や映像等
	5 板書は主に	教師の板書計画	・	・	・	・	・	・	子どもの発言内容
	6 指名は主に	教師が	・	・	・	・	・	・	子ども同士で
	7 学習ノートは	板書の記録	・	・	・	・	・	・	考えや発想の記録
	8 発問は	一問一答型	・	・	・	・	・	・	一問多答型
	9 発言の量は	教師が多い	・	・	・	・	・	・	子どもが多い
	10 授業の進め方は	教師が主導	・	・	・	・	・	・	教師は脇役
	11 授業の展開は	問題解決・完結型	・	・	・	・	・	・	問題解決・連続発展型
	12 授業スタイルは	講義・座学型	・	・	・	・	・	・	説明・発表・討論型
	13 学習の方法は	決めていない	・	・	・	・	・	・	決めている
	14 授業の時間配分は	決めていない	・	・	・	・	・	・	決めている
	15 机間指導は主に	理解が遅い子	・	・	・	・	・	・	理解が早い子
	16 評価の実施は	事後評価が主	・	・	・	・	・	・	事中評価が主
	17 学習形態は主に	一斉学習	・	・	・	・	・	・	小集団・グループ学習
	18 GTなどの導入は	消極的	・	・	・	・	・	・	積極的
	19 ほめことばや注意は	注意すること	・	・	・	・	・	・	ほめること
	20 勉強は	努力と忍耐	・	・	・	・	・	・	おもしろく楽しい
	21 授業で一番は	知識・技能の定着	・	・	・	・	・	・	学習意欲
	22 子ども同士の学習は	消極的	・	・	・	・	・	・	積極的
③	23 まとめは	教師が主	・	・	・	・	・	・	児童が主
	24 次時の学習内容を	子どもに伝えない	・	・	・	・	・	・	子どもに伝える
④	25 家庭学習の内容は	復習中心	・	・	・	・	・	・	予習中心
	26 家庭学習の出し方は	決めていない	・	・	・	・	・	・	決めている
	27 発展的な家庭学習は	出さない	・	・	・	・	・	・	出す

図1 質問紙（教師の授業スタイル）

また、「子どもの学習の好み」の質問項目は、「教師の授業スタイル」の設問項目と関連させ、子どもに理解可能な内容に置き換えて作成した（図2参照）。なお、調査に当たっては、子どもに設問の意図を具体的に説明しながら一項目ずつ実施した。

回答にあたっては、教師、子どもとも（ほとんど）、（かなり）、（どちらかといえば）、（どちらかといえば）、（かなり）、（ほとんど）の6段階で評価させた。また、「子どもの学習の好み」の傾向は、「学習の好み1」、「学習の好み2」のⅠ（ほとんど）、Ⅱ（かなり）、Ⅲ（どちらかといえば）を選択した人数をそれぞれ合計し、学級全体における割合（％）が多い方を棒グラフにして表した。

①…導入 ②…展開 ③…まとめ ④…家庭学習 Ⅰ…ほとんど Ⅱ…かなり Ⅲ…どちらかといえば

項 目		学習の好み1	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅰ	学習の好み2
①	1 どちらの勉強がすき	おぼえる勉強	・	・	・	・	・	・	考える勉強
	2 勉強をはじめるのは	先生に言われて	・	・	・	・	・	・	自分から
	3 教科書を使う勉強は	すき	・	・	・	・	・	・	きらい
②	4 勉強がよくわかるのは	黒板	・	・	・	・	・	・	ビデオ、実験、作業
	5 黒板の字や絵をみると	勉強がわかりにくい	・	・	・	・	・	・	よくわかる
	6 指名されるのは	先生に	・	・	・	・	・	・	子ども同士で
	7 勉強がわかるノートは	黒板を写したノート	・	・	・	・	・	・	考えを書いたノート
	8 意見が出る勉強は	きらい	・	・	・	・	・	・	すき
	9 意見がたくさん言える勉強	きらい	・	・	・	・	・	・	すき
	10 意見を言い合う勉強は	きらい	・	・	・	・	・	・	すき
	11 疑問がわいてくる勉強は	きらい	・	・	・	・	・	・	すき
	12 説明や発表する勉強は	きらい	・	・	・	・	・	・	すき
	13 教科書の勉強の仕方は	知らない	・	・	・	・	・	・	知っている
	14 勉強がわかる方法は	知らない	・	・	・	・	・	・	知っている
	15 個別に教えてくれること	すき	・	・	・	・	・	・	きらい
	16 だんだんわかる勉強	きらい	・	・	・	・	・	・	すき
	17 グループ学習は	きらい	・	・	・	・	・	・	すき
	18 他の先生の勉強は	きらい	・	・	・	・	・	・	すき
③	19 ほめる・注意されること	きらい	・	・	・	・	・	・	すき
	20 勉強は	努力・がんばること	・	・	・	・	・	・	おもしろく楽しいこと
	21 勉強したい気持ち	よわい	・	・	・	・	・	・	つよい
④	22 友達との勉強は	自分でするのがいい	・	・	・	・	・	・	すき
	23 まとめは	先生が	・	・	・	・	・	・	自分たちが
	24 次の勉強の内容は	知らない	・	・	・	・	・	・	知っている
④	25 家庭学習は	復習がすき	・	・	・	・	・	・	予習がすき
	26 毎日決まった宿題は	変わる方がいい	・	・	・	・	・	・	すき
	27 少し難しい家庭学習は	きょうみがない	・	・	・	・	・	・	きょうみがある

図2 質問紙（子どもの学習の好み）

2 研究対象とした授業者

本研究が対象にした学級は、愛媛県内の公立小学校の3学級である。また、3人の教諭とも4月に初めて受け持った学級で、A教諭とB教諭は同じ学校に勤務している(表1参照)。なお、調査は、2016年7月に実施した。

表1 研究対象の学級及び担任

	A教諭 (女性)	B教諭 (男性)	C教諭 (男性)
担任学年(児童数)	第6学年(20名)	第5学年(26名)	第5学年(27名)
教職経験年数	24年	3年	4年
本校勤務年数	2年目	3年目	2年目

3 授業改善の手がかり

「教師の授業スタイル」と「子どもの学習の好み」をまとめた調査結果を担任に示し、次の2点について質問紙による回答を求めた。

質問1:「調査結果から考えたり思ったりしたことを教えてください。」

質問2:「今後に向けて授業をどうしようと思いましたか。何を、どうするか具体的に教えてください。」

IV 結果と考察

1 「教師の授業スタイル」と「子どもの学習の好み」

3名の「教師の授業スタイル」と学級の「子どもの学習の好み」を示したのが、図3～図5である。全体的な傾向をみると、A教諭とA教諭の学級の子どもたちは、グラフの右側に棒が多く集まり似かよった傾向がみられる。一方、B教諭とC教諭は、グラフの左側に棒が多く集まっている。

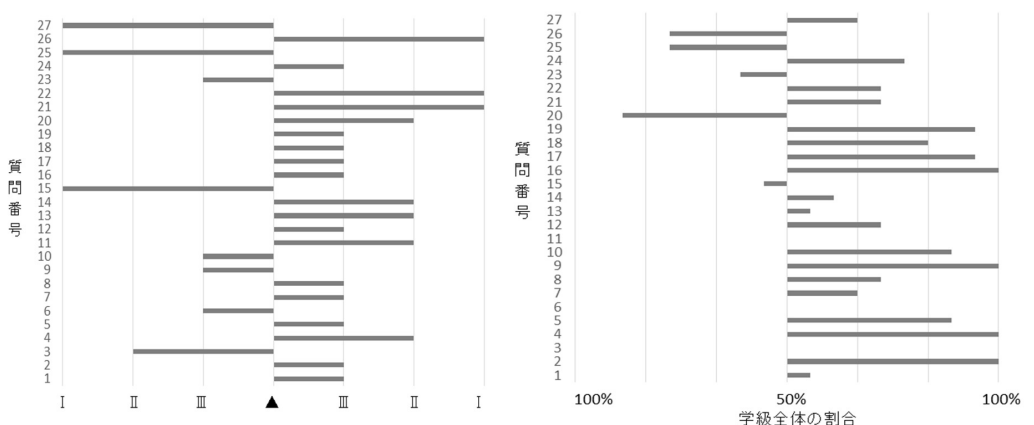


図3 A教諭の授業スタイル(左)とA教諭の学級の子どもの学習の好み(右)

(*棒グラフの左右は、質問紙の左右の内容と対応させている。図4、図5も同様)

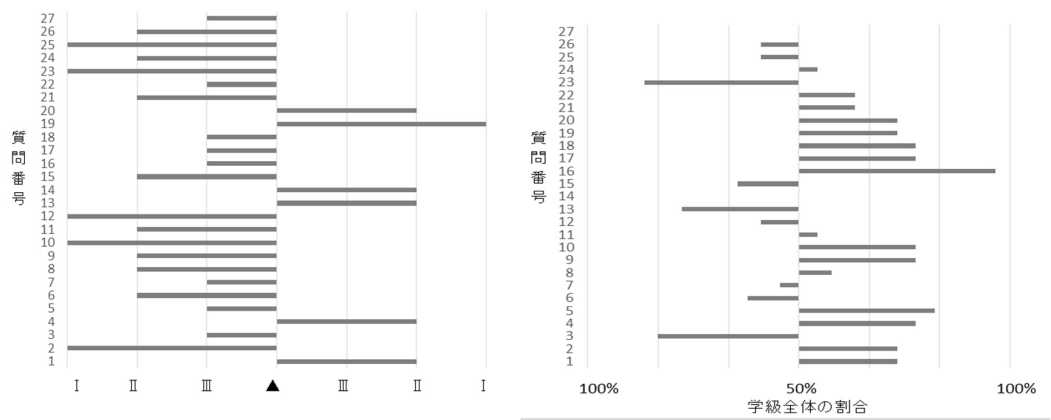


図 4 B教諭の授業スタイル(左)とB教諭の学級の子どもの学習の好み(右)

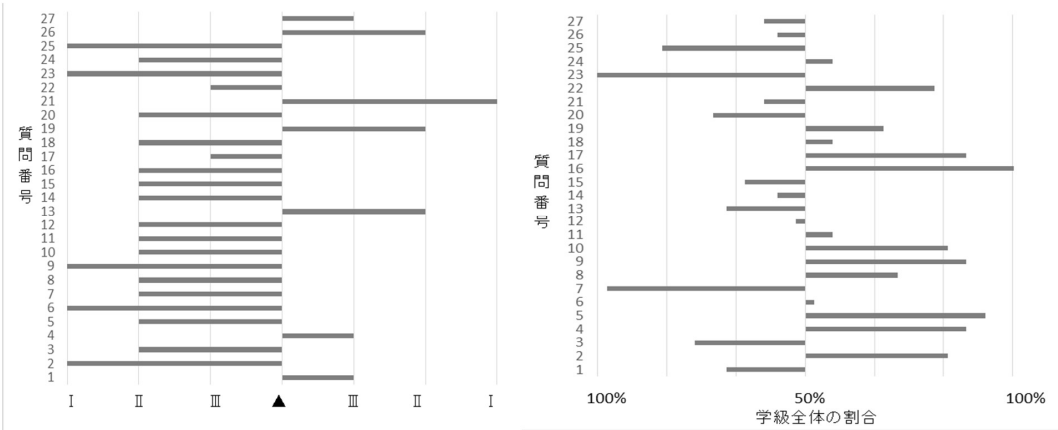


図 5 C教諭の授業スタイル(左)とC教諭の学級の子どもの学習の好み(右)

これに対し、B教諭とC教諭の学級の子どもたちは、グラフの右側に棒が多く集まっている。すなわち、「教師の授業スタイル」と「子どもの学習の好み」が異なった特徴がみられた。

このことをさらに詳しく調べるため、「教師の授業スタイル」と「子どもの学習の好み」に共通している箇所をまとめたのが表2である。A教諭は、27の質問項目のうち19項目(70%)に子どもたちと共通していた。一方、B教諭とC教諭は子どもたちと共通しているところは40%前後であった。つまり、子どもの学習の好みと教師の授業スタイルが異なる項目

表 2 教師と子どもに共通している割合

対 象	共通した項目
A教諭と子どもたち	7 0 % (19/27)
B教諭と子どもたち	4 1 % (11/27)
C教諭と子どもたち	3 7 % (10/27)

が多かった。

次に、教師と子どもたちに共通している内容と異なる内容について、それぞれの教諭について詳しくみていくことにする。

(1) A教諭の学級

A教諭は、導入段階(質問項目 1, 2)で、子どもの学習の好みが同じ傾向にあり、特に質問項目 2(子どもから出された学習課題をもとに進める授業)に学級の子どもの好みの傾向が強くなっている。さらに、授業展開では、質問項目 4, 5, 16, 17, 18, 19 に子どもの強い学習の好みの傾向がみられる。すなわち、A教諭が黒板だけでなく具体物や映像を使ったり、子どもの発言を黒板に書いたり、学習形態を変えたり、ゲストティーチャーの協力を得たりする授業である。また、それに加え、質問項目 8, 12, 21, 22 にも子どもの学習の好みが見られる。すなわち、教師の一問多答型の発問、説明・発表・討論型の授業、子ども同士の学び合いの授業スタイルである。次に、授業のまとめでは、質問項目 24, すなわち、次時にどんなことを学習するかを知って授業を終えることを子どもたちは好んでいる。また、家庭学習に関しては、質問項目 25 の復習中心の学習を好んでいた。

この学級は、全体的に教師が子どもの自主性・主体性をめざす授業に取り組み、子どもたちもそのような学習スタイルを好んでいる傾向がみられる。なお、教師と子どもと大きく違うところは、質問項目 20 であった。すなわち、教師は、「勉強はおもしろく楽しい」と思える授業展開をめざしているが、子どもは、「我慢して努力すること」というとらえ方をしていた。また、家庭学習に関する質問項目 27 で、教師は発展学習を出さない指導方針ではあるが、子どもは発展学習を出してほしいと思っている。このことについては、今後検討する必要がある。

(2) B教諭の学級

B教諭の導入段階は、教師が学習課題を提示する授業スタイル(質問項目 2)が強い。それに対し、子どもたちは、教師の学習課題ではなく、自分たちの学習課題をもとに進める学習を好んでいる。授業展開では、質問項目 3(教師が教科書を主教材として行う授業)と子どもの学習の好みと同じで、強い傾向がみられる。また、質問項目 3 のような顕著な傾向はみられないものの、質問項目 6, 7, 12 には、教師と子どもに同じような傾向がみられた。すなわち、子どもは教師が書いた板書をノートに写したり、先生の話の聞くといった講義形式の授業を好み、考えや発想をノートに記録したり、説明や発表をするといった討論型の授業は好んでいないということである。一方、教師と子どもに大きく異なる傾向が見られたのは、質問項目 5, 9, 10, 16, 17, 18 である。すなわち、教師が多く発言する教師主導の授業形態、学習形態を変えない一斉学習について異なる学習を好む傾向を示していた。つまり、質問項目 12 に見られるような、友達の前で説明をしたり、友達同士で討論し合うといった自分が前面に出て主体となる授業は好まないものの、学習形態を変えたり、ゲストティーチャーが授業をしたりする授業形態を好んでいる傾向がみられた。次に、まとめの段階では、質問項目 23 に教師も子どもも同じような傾向が強くみられた。すなわち、学習のまとめは教師が行い、子どもは教師がまとめを行ってくれることを好んでいた。また、家庭学習は、教師は復習中心の課題(質問項目 25)を与え、子どもも同様に復習を中心とした学習を好む傾向がみられた。

この学級は、全般的に教師が学習活動を主導する特徴がみられる。それに対し子どもは一斉授業だけでなく他の授業形態も好んでいた。すなわち、グループ学習などを通して、子ども同士が学ぶ授業形態を取り入れることである。このことは、今後の授業改善を行う上の手がかり

の一つになるものと思われる。さらに、教師主導の学習のまとめ、板書を写すだけのノートの使い方について、子どもたちの多くは嫌だと感じていない。子どもの思考力、理解力などを育てる上でノートの活用は大切であり、授業改善に向けて検討する必要がある。

(3) C教諭の学級

C教諭の導入の段階は、質問項目 1, 2 とともに子どもの学習スタイルと異なっていた。すなわち、教師は、思考・判断・表現力を育てようと考えているにもかかわらず、子どもたちは、知識や技能を覚える学習を好む傾向がみられた。また、学習課題を教師が与える授業スタイルに対し、子どもたちは、自分たちの学習課題をもとに授業を進める学習を好む傾向が強かった。授業展開では、教師の授業スタイルと子どもの学習の好みが大きく異なっているところが多くみられた。すなわち、質問項目 5, 9, 10, 16, 17, 21, 22 である。つまり、子どもは、授業中に意見をたくさん発言したり、グループで話し合ったり、友達同士で勉強したりする学習が好きな傾向が強いにもかかわらず、教師の授業スタイルは、教師が話すことが多く、一斉学習主体であり、子ども同士が取り組む学習に対してもあまり行わない。こういった傾向は、家庭学習にもみられ、質問項目 26, 27 では、教師は家庭学習の出し方を決め、発展的な学習も出しているが、子どもはそのことに対して異なる傾向を好んでいる。

C教諭の学級における、教師の授業スタイルと子どもの学習の好みの大きなズレを教師がいかに認識し、具体的に授業をどのように改善すればよいかを考えなければならない。

2 子どもの特性による「子どもの学習の好み」と「教師の授業スタイル」

学級における子どもの学習の好みは、子どもの特性(本研究では学業成績を特性とした)によってどのような違いがみられるか、「教師の授業スタイル」と比較することによって授業改善の手がかりを検討することにした。なお、成績上位、中位、下位の区別は、学業成績全般をもとに、上位、下位それぞれ 5 名程度を担当に報告してもらい、それ以外を中位とした。

表 3 は、一つの質問項目を回答した子どもたち一人一人の学習の好みの状況を表したものである。3 名の教師について、著しい特徴がみられる項目のうち、それぞれ 2 項目を選び、教師の授業スタイルと子どもの特性を検討することにした。

表 3 「教師の授業スタイル」と子どもの特性による学習の好み

▲・・・成績下位 ○・・・成績中位 ■・・・成績上位 *網掛けは担任の授業スタイル

	項目	授業 スタイル	ほとんど	かなり	どちらか といえば	どちらか といえば	かなり	ほとんど	授業 スタイル
A 教 諭	20勉強は	努力と忍耐	○○○■▲■ ▲▲○○	▲○○	▲○○■	○	○○		おもしろく 楽しい
	27発展的な 家庭学習	出さない	▲▲○	○■	▲○	○○○	○○○	○○○■▲■ ▲	
B 教 諭	10授業の進 め方	教師が主導		○■	○○○	○○○	▲○○○■	○○○○■▲ ▲▲▲○	教師は脇役
	23学習の まとめ	教師が主	○○○○■▲ ▲○○○○	▲○○○○■ ▲	○■		▲	○○	
C 教 諭	15机間指導	理解が遅い 子	○○○○○	▲○○○○■	▲▲▲○○○	○○○○■	▲○■	■▲	理解が早い 子
	21授業で 一番は	知識・技能 の定着	▲	▲○○	○○○○■▲ ▲▲▲○○○	○○○○■▲	○○○■	○	

(1) A教諭の授業スタイルと子どもの特性(学業成績)

質問項目 20 について、教師は「勉強はおもしろく楽しい」と感じる授業をめざしているにもかかわらず、学級の 85% の子どもは、勉強は「努力と忍耐」と感じている項目である。そのうち、成績上位の子どもの 4 名のうち 3 名はその傾向が強い。また、成績下位の 2 名も同様な傾向がみられる。学習がおもしろく楽しいと子どもが感じる授業をどうすればよいか、改善を検討する必要がある。

また、質問項目 27 は、発展的な家庭学習に関する質問項目である。A 教諭は、発展的な学習課題を出さない授業スタイルであるが、学級の 40% の子どもは、発展的な家庭学習を好んでいる傾向が強い。特に、成績上位の 4 名の子どものうち 3 名が含まれていた。このことから、学級で全員に同じ家庭学習を課すのではなく、例えば子どもの興味や理解の程度に応じた課題を出すことも方法の一つとして考えられる。

(2) B教諭の授業スタイルと子どもの特性(学業成績)

質問項目 10 は、授業の進め方に関する内容である。B 教諭の授業スタイルは教師主導の授業スタイルである。これに対し、学級の 75% は、子ども同士意見を言い合える学習を好み、成績上位の子どもだけでなく、成績下位の子どもたちにとっても強い傾向がみられる。例えば、学業成績に関係なく意見を言い合える学習場面をどこで、どのように作るかといったことを検討する必要がある。

また、質問項目 23 は、学習のまとめはだれがおこなうかについて質問した項目である。この学級は B 教諭が行っている。こういった授業スタイルが好きと感じている子どもは 87% もみられ、成績上位の子どもは全員が同じ傾向だった。まとめの段階は、1 時間の授業が子どもに理解されているかを確かめる大事な段階でもあり、検討が必要である。

(3) C教諭の授業スタイルと子どもの特性(学業成績)

質問紙 15 は、教師の机間相談の項目であり、C 教諭は理解が遅い子どもの指導に当たっている。これに対し、成績下位の 1 名の子どもはこのことを好きだとは感じていない。また、成績上位の 4 名のうち 3 名は、個別に教師が指導してくれることを好んでいない。教師が成績下位の子どもにいつも指導に当たることが、学級内で成績による順位の固定化につながっていることも考えられる。教師と子どもとの人間関係も含め、さらに検討していく必要がある。

また、質問項目 21 について、C 教諭は、学習意欲が一番大事だと考えて授業を行っているが、勉強をしたいと思わない子どもは学級の 62% を占めている。特に成績下位の子ども全員が含まれ、成績上位の 5 名のうち 2 名は同じ傾向である。こういった子どもたちに学習意欲がわいてくる授業の工夫を考えなければならない。

3 「子どもの学習の好み」と教師(担任)の授業改善

調査後、「子どもたちの学習の好み」の報告をまとめた資料をもとに、担任が考える授業改善を質問紙で報告してもらった結果が表 4～表 6 である。3 人の教師とも、質問紙の結果から具体的な授業改善の方法を見つけている。

まず、A 教諭の質問紙の報告の内容をみると、質問項目 8, 12, 16, 17 の報告に共通している内容がみられた。すなわち、一問多答型の教師の発問、説明・発表・討論といった授業形態やグループ学習に対する子どもの学習の好みは、思っていたより強いことから、A 教諭は、さらに発展させようとしている。つまり、「子どもの学習の好み」が、「教師の授業スタイル」を

さらに押し進めるきっかけになっている。このことは、本研究が、授業改善を行う際の教師の意思決定、すなわちどのような授業スタイルをとるのかといった判断を左右するきっかけになることを示している。

表 4 A 教諭の授業改善案

項目	調査結果から	授業改善への考え
7	考えや発想の記録というノートの作りの方 が多数の子どもがよくわかるということが意 外だった。	板書を写せばまあ合格と考えていたので、 もっと自分の考えをしっかりと書くようにさせ たい。
8	一問多答型が好きな子が大変多い。そこまで 多様な意見が出ていると日ごろ思っていな かったのでびっくり。	多様な考えを引き出せ、練り合いにつながる 発問を工夫したい。
12	説明・発表・討論型の授業が好きということ だけど、実際は苦手な子が多いと私は思っ ていた。	もっと説明・発表・討論型でアクティブラー ニングの授業づくりをしていきたい。
16	はじめはわからなくてもだんだんわかってく る子が多いのはとてもうれしかった。	1時間の中でわかったと思えるような授業に したい。
17	小集団グループ学習が好きな児童がとても多 い。	これからもベア、グループ学習を多くし、友 達同士がつながるようにしていきたい。
20	(記述なし)	努力と忍耐の授業にならないようにしてい なくてはと、反省しました。
26	宿題の出し方について、変わるのいいと思 っている児童が多い。	やってみたいと思える宿題を工夫したい。

次に、B教諭の報告をみると、学習課題を教師が提示する授業や教えこむ授業といった自分の授業に対する問題点をあげ、今後の改善方法を具体的に示している。しかし、学級全体の傾向や子どもの特性と授業に関する検討は十分ではなく、報告数も4項目にとどまっている。この原因として、本人の教職経験が3年と短いために、学級全体の学習の好みや子ども一人一人の特性を考慮に入れた授業を進めることが難しいことがあげられる。また、勤務校は、全学年1学級であり、身近に相談できる教師がいないことも原因として考えられる。その解決のための一方法として、校内の同僚教師によるメンタリングがあげられる。すなわち、課題を一人で抱えるのではなく、同僚教師と共に解決していく組織的・計画的な解決方法である。なお、このことについては、教師のインタビューなどでさらに検討する必要がある。

最後に、C教諭の報告を検討する。C教諭もB教諭と同様に報告数が少ない。この学級は、本稿、「結果と考察」の1で述べたように、教師の授業スタイルと子どもの学習の好み異なる項目が多い。質問項目の1, 2, 5, 6, 8, 9, 10, 11, 13, 16, 17, 18, 21, 22, 24, 26, 27の17項目である。つまり、教師の授業スタイルと子どもの学習の好みにズレが生じているところであり、早急な授業改善が望まれる。しかしながら、C教諭の報告した項目で、17項目に含まれる項目は質問項目2のみであり、他の項目については問題点としてとらえていない。したがって、学級における問題点は何かをまず担当がきちんと把握したうえで、具体的な改善のための計画(Plan)－実施(Do)－再調査(Check)を行い改善・実施(Action)する必要がある。

表 5 B教諭の授業改善案

項目	調査結果から	授業改善への考え
2	学習課題を教員から示していた。子どもたちは自分たちから発生するのが良いと考えていてギャップを感じた。	課題を自ら適切に設定できる力を養っていく必要があると感じた。ここまで学んで次に知りたいことは何かなど。
9	つい教えこむ形になってしまうことが多いと反省した。	考えを深めるための適切な支援を行った上で、十分に時間を確保していきたいと思う。
16	わからない問題でも、勉強することでわかってくるという感覚をもっていることがわかった。	単元の途中や終わりに「今わかっていること、わからないこと」など振り返る時間等を設けたい。
22	自分一人で取り組むのと、友達と取り組むのが好きな割合がほぼ同じに分かれていることが意外だった。	双方の良いところを理解させようで授業の中に取り入れていきたい。

表 6 C教諭の授業改善案

項目	調査結果から	授業改善への考え
2	教科書や教師用指導書が示す課題に頼りきりだったと改めて思った。	毎時のまとめの後に、次時の取組のようなことを考えさせる時間を作る。
15	成績上位層が「きらい」と答えていた。自分の答えに自信がないのか、それとも発表の指名を避けたいのだろうか。	基本は今まで通り行う。ただ、理解が早い子のためのプラスの課題を与えたい。
19	「ほめる」と「注意」のどちらについて答えるのだろうか。おそらく注意のことを中心に考えたのか・・・。	好き嫌いにかかわらず、注意すべき時は注意する。それ以上に、小さなことでもたくさんほめる。
23	子どもたちの中に「授業のまとめを自分たちでする」という発想自体がほとんど無いのだろうと思った。	子どもたちにまとめを考えさせる。ある程度方向性を持たせないと、上手なまとめにならないのではないか。

V まとめと今後の課題

本研究では、授業の導入－展開－まとめ－家庭学習といった授業過程における「教師の授業スタイル」と「子どもの学習の好み」を比較することから、授業改善への手がかりが得られるかを検討した。その結果、いくつかの知見を得ることができた。

- (1) 「教師の授業スタイル」と「子どもの学習の好み」は、学級によって一致する割合が異なり、一致する割合が高い学級で70%，低い学級で37%と大きな差があることがわかった。今回は、3 学級だけの結果であるが、本調査以外の学級について実施しても学級による差がみられることが予想される。
- (2) 「教師の授業スタイル」と「子どもの学習の好み」が一致している内容、異なっている内容を検討することにより、授業の「どの段階」の「どの場面」で教師の「どういった教授行動」を改善すればよいかという、改善の視点を明らかにすることができる。
- (3) 「教師の授業スタイル」と「子どもの学習の好み」を、学業成績(上位，中位，下位)をも

とに検討することにより、子どもの学習特性に応じた授業の改善点を知ることができた。例えば、成績上位の子どもは、教師がいつも出す家庭学習を「復習」ではなく「発展的な学習」を行いたいと思っていたり、成績下位の子どもを中心に机間指導を必ずしも好ましく感じていなかったりしていることである。こういった子どもの「学習の好み」を知ることにより、家庭学習に発展的な課題を加えたり、成績下位の子どもの指導方法を工夫したりする具体的な授業改善の手だてを得ることができる。

(4) 「子どもの学習の好み」を教師が知ることは、どのような授業スタイルをとるのかといった教師の意思決定を行う手がかりになっていることがわかった。このことは、教師が授業改善を実施するための判断基準になることが示唆される。

(5) 「教師の授業スタイル」と「子どもの学習の好み」の傾向や一致点・差異点は、教師によって把握の仕方に差が見られた。すなわち、教職経験が豊かなA教諭は、調査結果から学級全体の傾向や子ども一人一人の状況を的確に把握していたが、B教諭やC教諭は調査結果の一部に着目していたり、問題点となる場면을発見できないでいたりしていた。このことは、A教諭に比べ、2人の教師は教職経験が短いことが原因の一つになっていることが考えられる。本人の調査結果に基づく解釈や考えを大切にしながらも、本人が気づかない点を補足するメンターの存在が大切になってくる。

以上の検討結果から、「教師の授業スタイル」と「子どもの学習の好み」の対比による授業分析は、授業改善につながる多くの手がかりを得ることができた。このことは、授業改善の方法の一つとして大いに活用できることが示唆される。

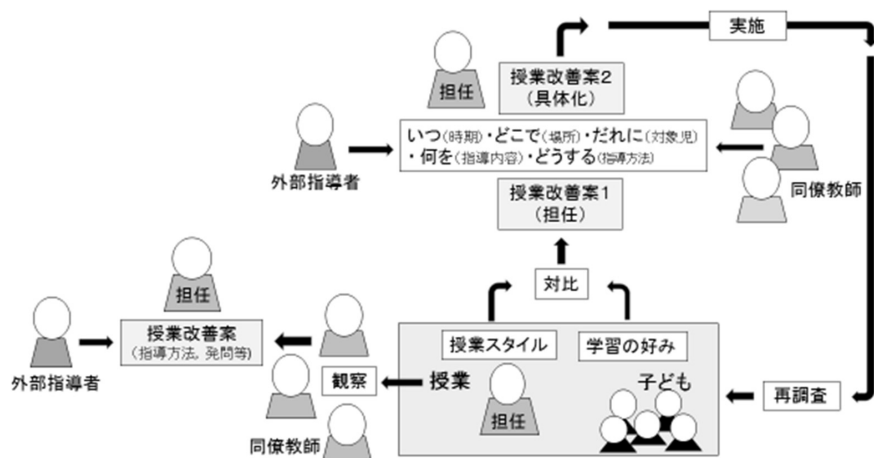


図6 授業改善サイクル

さらに、図6は、本研究による授業改善の方法(図の右側)と一般的に行われている授業改善の方法(図の左側)を表している。すなわち、一般的に行われる授業研究は、授業者が授業を行い、授業を観察した同僚教師や外部指導者が、経験や教授知識をもとに話し合い、出された手がかりをもとに授業改善を行う方法である。これは、わが国独自の授業研究として広く行われ

ている。しかし、筆者の経験からこの方法の問題としては、次の点があげられる。

- ・ 観察者である教師の同僚教師に対する遠慮があり授業改善につながる話合いになりにくい。
- ・ 観察者である教師の経験の差などにより、改善の内容が焦点化しにくい。
- ・ 授業改善の手がかりが、主として子どもの発言、表情といった外部の情報に限られる。
- ・ 話合いによって得られた授業改善の効果の検証が困難である。
- ・ 多くは1時間の授業に限られる。

これに対し、本研究はこれまでの授業研究の方法を改善する効果が期待できる。特徴として、次の点があげられる。

- ・ 担任が授業改善の主体者となる(授業改善案1の作成)。
- ・ 同僚や外部指導者は、担任の授業改善案(改善案1)や調査結果をもとに授業改善案(改善案2)を作成し、授業改善を進める「共同研究者」となる。
- ・ 子どもの内面性(「子どもの学習の好み」)を問題にしている。
- ・ 改善案が効果をもたしたかどうかは再調査によって明らかになる。
- ・ 授業改善サイクル(図6の右側)により継続した授業改善が可能になる。

本研究は、図6の授業改善案1を検討し、授業改善の可能性を検討した段階である。今後は、これをさらに授業改善案2に発展させ、日々の授業で活用・実施し、再調査・検証をもとに、本研究が授業改善や教師の成長に効果的かどうかについて、さらに検証していく予定である。

参考文献

- 1) 中原淳(監修) 脇本健弘・町支大祐(2015)『教師の学びを科学するーデータから見える若手の育成と熟達のモデル』北大路書房
- 2) 横浜市教育委員会(2011)「人材育成指針」
- 3) Schön,D.A.(1983)The Reflective Practitioner:How Professionals Think in Action.NY:Basic Books.(訳)佐藤学・秋田喜代美(2001)専門家の知恵ー反省的実践家は行為しながら考える, ゆるみ出版
- 4) 藤岡完治・浅田匡・生田孝至(2009)『成長する教師ー教師学への誘い』金子書房.
- 5) 渡辺和志・吉崎静夫(1991)「授業における児童の認知・情意過程の自己報告に関する研究」.日本教育工学雑誌 15(2), pp.73-83
- 6) 吉崎静夫・渡辺和志(1992)「授業における子どもの認知過程ー再生刺激法による子どもの自己報告をもとにしてー」日本教育工学雑誌 16(1), pp.23-39
- 7) 吉崎静夫・渡辺和志(1992)「授業における子どもの情意過程」.鳴門教育大学研究紀要(教育科学編) 7, pp.253-268
- 8) 中央教育審議会(2015)「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」
- 9) 大分市教育センター(2016)「授業力自己評価表」
- 10) 青木久美子(2005)「学習スタイルの概念と理論ー欧米の研究から学ぶ」メディア教育研究 2(1), pp.197-212

Improving Classroom Instruction through Comparison of Teaching Styles and Student Learning Preferences

WATANABE, Kazushi

Abstract

This study was designed to investigate the relationship between the teaching styles of three teachers and the learning preferences of their students through the use of a questionnaire.

The results included:

1. The teaching style and student learning preferences were different in each class, and the comparison of common ground and differences meant we were able to gain cues useful in improving classroom instruction.
2. Learning preferences differed according to the characteristics of the children (high achievers, middle achievers, and low achievers). The finding that the learning preferences were related to the level of student achievement provided useful cues for improving classroom instruction
3. The points of view and cues for improving classroom instruction differed between teachers.
4. The following procedure allowed for a new process of improving classroom instruction: A lesson plan(first plan), advice from fellow teachers and the teacher's consultant regarding the lesson plan, improvement of the lesson plan (second plan),execution of the lesson, reinvestigation, course evaluation, and redesign.

【Key words】 Lesson Style, Learning Preferences, Lesson Study, Course Evaluation, Improving Classroom Instruction, Teacher Education